

11. 奥山久米寺周辺の調査

(昭和57年8月)

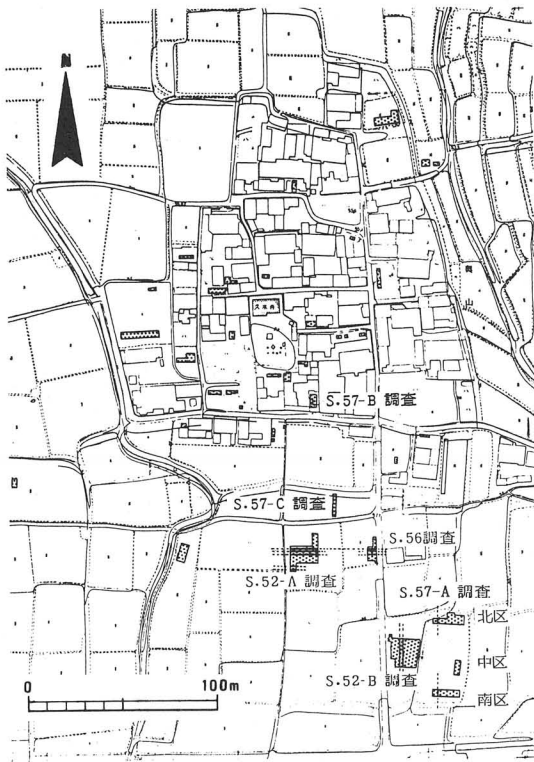
今年度、奥山久米寺周辺では、4ヶ所で調査を行なった。ここではA調査地について報告する。A調査地は、奥山久米寺塔址の南東約200mにあり、昭和52年に、8世紀中頃の土器を含む南北溝SD130を検出した水田に東接している。調査は、それら奈良時代の遺構の広がりの確認を主な目的として、南北に長い水田に、北・中・南の三調査区を設けて実施した。調査地の層序は、上層から耕土・床土・黄褐色粘質土・暗黄灰色粘質土であり、遺構は暗黄灰色粘質土層上面で検出した。

遺構 北調査区では、南北溝SD200、掘立柱建物SB186・187・188・189、土壇SK191などを検出した。中・南調査区では、SD200の南延長部分のほか、柱穴、柱根を検出したが、調査範囲も狭く、遺構の存在を確認したにとどまる。

南北溝SD200は、北・南調査区の西端で検出した素掘り溝で、幅2.5m以上、

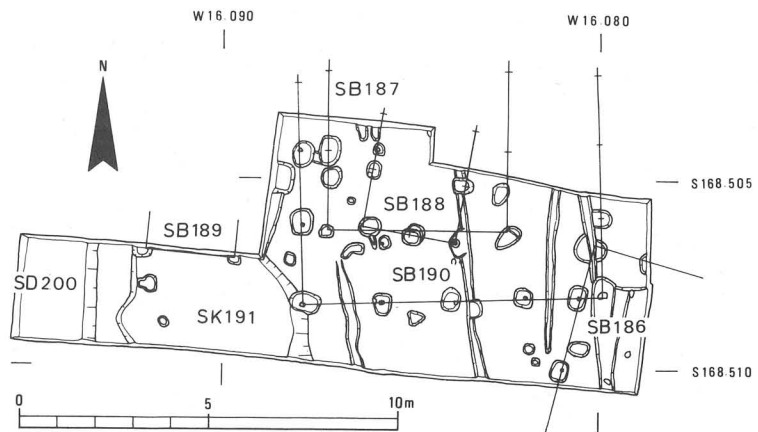
深さ0.4mである。各々で長さ2m余を検出したにすぎないが、両者は一連の溝とみられ、南北40m以上につづくものである。埋土からは、7世紀中葉～後半の土器が出土した。

SD200の東で検出した掘立柱建物群は、建物方位の上から、3つに大別される。ほぼ真北に近い方位をもつSB187は、桁行1間(2.1m)以上、梁行2間(2.4m等間)の南北棟である。北で西へ約2°振れるSB190は、東西4間、南北2間以上の建物で、柱間は東西の両脇間が2.1mと広く、中央間は1.9m等間である。南北の柱間も南が2.1m、北が1.9mとなっている。柱穴には直径14cm



第34図 奥山久米寺周辺調査位置図(1:4000)

の柱根を残すものがある。北で東へ大きく振れる建物にはSB186・188の2棟がある。調査区東端で検出したSB186は、東西1間以上、南北2間以上の南北棟で、隅の柱間が1.45 mと狭く、ほかは



第35図 北区調査遺構配置図(1:200)

1.95 mである。SB188は、SB187と重複する建物で、桁行1間(1.5 m)以上、梁行2間(1.2 m等間)の南北棟である。SB187よりも新しい。なお、建物群の西にある土壌SK191は、柱穴の上を覆う8世紀中頃の土器を含む土層を掘りこんでつくられており、埋土からは、奈良時代後半の土器が出土した。

まとめ 今回検出した掘立柱建物群は、その重複関係から、8世紀中頃以前の遺構であり、柱穴出土土器等を考慮すれば、7世紀後半～8世紀前半代を中心とする短期間に造替をくりかえしたものとみられる。この特徴は、昭和52年に検出した奥山久米寺南限付近での所見(概報8)と一致するもので、同寺跡南方には、それらが一体として、奈良時代に中心をおいた建物群が広く営まれていたものとみられる。

南北溝SD200については、埋土出土土器からその使用年代の一端を7世紀中頃から後半におくことができるが、溝の開削・廃絶の時期は明らかでなく、建物群との関わりも推定の域をでない。ただ、昭和52年にこの西約18mの位置で検出した南北溝SD130は、8世紀中頃の土器を含む溝であり、いま仮りに、両溝を北へ延長すると、先の寺城南限の堀SA110や、その南の東西道路SF120と交叉する位置にあり、奈良時代の建物群が、これらの溝で区画されていた可能性がある。なお、SD200は、藤原京東京極の東約258mにあり、藤原京条坊との関わりは認められない。東西道路SF120についても同様の所見であって、これら奈良時代に存続する藤原京条坊以外の地割については、それらに区画された可能性のある奈良時代の建物群の配置や性格とともに、今後の調査の進展をまって検討したい。